

1 May 2019

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan *Newsletter No. 18*



W. T. ステッドからペアーズ石鹼まで

日本女子大学家政学部教授 川端 有子

ときどき、まったく無関係だと思っていた人々がつながっていたり、そんなことをしているとは夢にも思わなかった人が残した業績に驚いたりすることがある。それが研究の一つの醍醐味であるわけだが、昨年、そんな経験に恵まれた。

ウィリアム・トーマス・ステッドと言えば、『ペル・メル・ガゼット』紙の編集者にして社会改革家、同紙に「現代のバビロンにおける乙女の生贄」を掲載して大きな話題を巻き起こし、ステッド法と呼ばれるようになる性交渉同意年齢を引き上げる法律の制定に寄与したことは、取材方法が「やらせ」に近いものだったことをも含め有名である。しかしこの法律が世紀末の「少女」の年齢を定義したということ以外、児童文学研究のコンテクストで彼の名前が出てくることはまずない。

彼が心霊術にも傾倒しており、タイタニック号の犠牲となって亡くなった後、水没者たちの霊を引き連れて交霊会に現れたという話の真偽はともかく、彼が貧しい人々、特に子どもたちに読書を勧めようと様々な活動に従事していたということ、「子どもたちのための本 (The Books for the Bairns)」シリーズをはじめとする廉価版の小冊子シリーズを編集し出版していたことは、知人がイギリスの古本屋で偶然購入したその中の一冊、「英雄たちの物語」を手に取り、その出所を調べ始めて初めて知ったことだった。(Bairn とはスコットランド語で子どものことだが、特にそこに意味はない。)

1895年、ステッドは巡回図書館を設立して、本を購入する余裕のない人々に読書の機会を広げようとしたが、彼の図書館の特徴は、他と違って子どものための本をたくさん取り揃えていることだった。それと同時に、出版し始めたのが100ページ以内のきれいな印刷した本に世界中の文学の精華を集める「傑作ライブラリー」のシリーズであった。最初に出版された96ページの『マコーレイの古代ローマ詩歌集』は3か月のうちに200,000冊が売れて小学校の教員や教育委員会に絶賛され、翌年には「ペニー・ノベリスト」「ペニー・ポピュラー・ノベリスト」シリーズを刊行する運びとなる。

これらは一冊1ペニーのペーパーバックであり、おとな向けのものだったが、ステッドは読書が子ども時代からの習慣に根差すものであり、階級と性差を超えて文学を広めるには、まず子どもたちのための読み物が必要であると考えていた。続いて彼は子どもにも読める安価で良質な読み物の出版を始めた。それが「子どもたちのための本」シリーズである。1896年3月、最初に出たのは『イソップ寓話集』だった。64ページの本文中に、アイルランド人画家ブリンズリー・レ・ファニュ(作家のシェリダン・レ・ファニュの末息子)による挿絵が200点以上添えられている。一年以内に売り上げはうなぎのぼりに上昇し、一か月150,000部という勢いで出版された。

続くシリーズの内容は、各国の昔話や神話、アンデルセン童話、ナーサリーライム、『ほら吹き男爵』や『ドン・キホーテ』のダイジェスト、ステッド自身が書いた『我らが母なる女王』と題したヴィクトリア女王の伝記、英国の歴史シリーズなど、多彩なラインナップの読み物が総計 288 冊、1920 年まで毎月一冊ずつのペースで出版され続けた。(ステッドの死後は娘が遺志を引き継いで続けたのである)。

ステッドはほとんどの本の前書きを書き、注釈を加え、読書の手引きを施した。どの本も 100 ページ以下であるから、当然リライトされているのだが、そこにはいかにともヴィクトリア朝人的なステッドの敬虔で利他的で常識を重んじるモラルティが反映されている。

このシリーズは公立小学校や教会などに箱買いされた可能性が高く、実際に 1 ペニーで子どもが買っていたかどうかは明らかでない。しかし初等教育の副読本として活用されたことは間違いなく、1907 年にステッドは 13 冊の選りすぐりのものをフランス語で出版した。これはフランスの学校で英語教育に使われて非常に評判となった。英語版とフランス語版はペアで 2 ペンス、送料無料。学校で使う場合 100 冊単位で購入すると送料、梱包料込みで 10 シリング。第一次世界大戦が始まるまで、ドーバー海峡の両岸で子どもたちの外国語教育に貢献した。

その他にもステッドは鉄道の駅に本の箱を置き、読み終わったらどこの駅に返してもいいというようなシステムを作り、文学を広めようと努めた。小学校が次第に義務化され、どの階級の子どもたちも文字を読み始めたころである。このような形の冊子で最初の読書が始まっていったのかと思うと感慨深い。

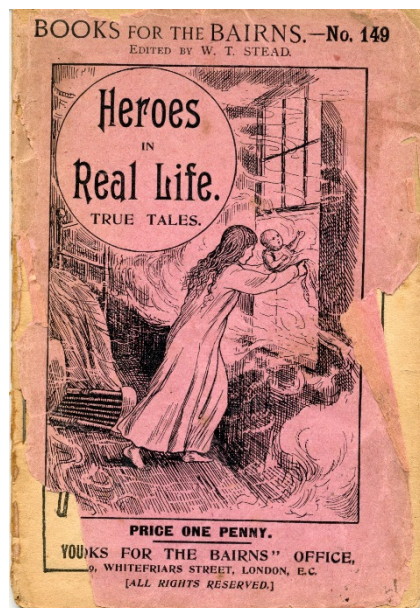
さて、手元にあるこのシリーズの一冊は 1908 年 6 月出版の『本当にいた英雄たち』(*The Heroes in Real Life—True Stories*) である。ステッドが書き下ろした一冊で、中身はごく普通の人々が成し遂げた英雄的な行為の物語を集めた短編集だ。表紙には、燃えさかる火事の火の中から赤ん坊を救おうとしている女性の絵が描かれている(ちょっと見たところ投げ込もうとしているように見えなくもないが)。**[Figure1]** その他にも難破船から人々を救った話など、老若男女問わず名もない人々の物語が集められている。

内容もさることながら、この一冊がまず私の興味を引いたのは、巻頭と巻末に載っている広告ページであった。ここでもう一つの興味深いつながりが浮かび上がったのである。子ども向けの叢書ということで、「離乳食」「栄養たっぷりのココア」「ベビーパウダー」など、親を意識した広告が載っているのだが、その中にあの有名なペアーズ石鹸の広告があったのである。ジョン・エヴァレット・ミレイの「バブル」の画で有名なペアーズ石鹸だが、周知のとおり敏腕プロデューサーが活躍した

この石鹸会社の広告には数えきれないほどの種類があり、どれも興味深い。しかしこの本に載っていたのは、今まで見たことがない『不思議の国のアリス』のグリフォンと偽ウミガメが登場する海辺のシーンのパロディ画だったのである。

キャロルの原作では偽ウミガメが、「美味しいスープ」の歌を歌い上げるところなのだが、そこに人魚がひとり、ペアーズ石鹸に座って新聞のようなものを持ち、アリスとグリフォンと偽ウミガメに向かって「美しい石鹸」の歌を歌っているのである。**[Figure2]**

そもそも「美味しいスープ」という歌も「美しき星よ」という詩をキャロルがパロディにしたものなのだが、ペアーズ石鹸はこれをさらにパロディに仕立て、「美しい石鹸、透明な茶色、… お化粧もポマードもどんなしみも落ちる、^{ピーチ}桃のようなお肌が^{ペアーズ}梨で手に入る、比類もなき、きれいな石鹸」としゃれてみせた。人魚は原作には出てこないが、海辺で歌を歌って人を魅惑する幻獣として、これほどふさわしいものはないだろう。絵にジョン・テニエルのサインはなく、非常にうまいけれども微妙に違いがある絵柄で、下のほうに「アリスにごめんね」と書いてあるのがおかしい。



[Figure1]



[Figure2]

実はこの冊子が出る数か月前、『不思議の国のアリス』もシリーズ入りしていた。イギリスで買えるもっとも廉価なアリスという触れ込みである。ステッドの出版活動からキャロル、ペアーズ石鹸、までがつながった。文化研究というのはこういう思ってもいないところにあるつながりを発見することなのだと今一度確認した次第である。(以上のことは昨年、日本キャロル協会の例会で報告させていただいた)。



文芸批評と歴史のヴィジョン ——*Public Moralists* 以降のステファン・コリーニ

ユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドン博士課程 町本 亮大

1960年代から80年代にかけて、英語圏における思想史（インテレクチュアル・ヒストリー）の実践が最も大きな成果をあげたのは、おそらく科学史と政治思想史の二領域においてである。ステファン・コリーニもまた、そのキャリアの初期においてはイギリス理想主義やニューリベラリズム周辺の研究に従事し、1979年に出版される最初の著書はL. T. ホブハウスに関するモノグラフだった。その4年後、現在では『かの高貴なる政治の科学』として邦訳の出ている研究書を、彼にとって19世紀イギリス思想史研究の盟友であるドナルド・ウィンチ、ジョン・バロウとの共著書として世に問い、1991年にはいわばヴィクトリア朝「知識人」研究の書である*Public Moralists*の刊行によって広くその名を知らしめることになる。

しかし、政治思想史の研究者が彼の仕事をフォローしているのは通常ここまでである。その後のコリーニは、対象とする時代に関しては20世紀へと焦点を移し、また政治思想と結びつきの深い人物より、むしろ文芸批評と名指される領域を活動の舞台とした著述家たちに主眼を置くようになる。すなわち、19世紀終わりの四半世紀以降の学問の専門分化と専門職化の流れに従い、ますます自律性を増すディシプリンに固有のルールに忠実な議論の構築を要求されることになるその後の政治思想の展開を追うのではなく、専門性の境界を越え出て公衆に語りかける知識人としての文芸批評家たちを主要な研究対象とするようになったのである。1986年にケンブリッジ大学の英文学部にポストを得たことも、「ケンブリッジ・イングリッシュ」と切っても切れない20世紀半ばの文芸批評の展開——ウィリアム・エンブソンやF. R. リーヴィスの名と結びつけられる「実践批評」からリチャード・ホガートとレイモンド・ウィリアムズの仕事に芽生えるカルチュラル・スタディーズの萌芽までの、思想的観点からも興味の尽きない英文学批評史の一時期——に対するコリーニの関心を強化することに役立ったに違いない。

ヴィクトリア朝文化研究に従事する者にとって、*Public Moralists*以降のコリーニの仕事はいかなる意味を持ちうるだろうか？ 第一に、20世紀以降をフィールドとするコリーニの研究は、彼のヴィクトリア朝思想史研究と、テーマや問題関心といった点で明確な連続性を持つため、われわれがヴィクトリアン・スタディーズの現代的射程を問題にする際に重要なヒントを提供してくれる可能性がある。いま*Public Moralists*の序論を読み返してみると、コリーニのその後の仕事を予示する言明が数多くみられることに気がつかないわけにはいかない。特筆すべきは、「知識人 (intellectual)」という語彙の現在の用法が流通する以前の時代に活動した知識人たちの研究である本書の時点で、のちに20世紀のイギリスにおける知識人論の諸相を主題とする*Absent Minds* (2006)で詳述されることになるコリーニの立場が一部明言されている事実である。知識人とは長らくイギリス的でない存在として表象されてきた。すなわち、すぐれてフランス的な存在としてイメージされてきた知識人（むしろその原型的アイコンはサルトルである）とは、哲学的理論を背景として対抗的 (oppositional) な立場から、いわば社会の外部から政治にコミットするものである。エスタブリッシュメントの一員として、理論的というより実際的で経験主義的な想定をもって政治にアプローチするとか、そもそも政治的实践にかかわることなく一般的諸問題を論じて公衆に語りかけるとかいうのは、本来的に「知識人」の仕事ではない、それゆえイギリスには知識人が不在であった——イギリスというよりはイングランドの歴史に深く根を張ったこの手の「不在テーゼ」への反駁として構想されているのが、ヴィクトリア時代から現在までの「イギリスの知識人た

ち」を扱うコリーニの一連の研究であると考えられるだろう。「不在テーゼ」の伝統でとりわけ大きな存在感を放ってきたのが、ペリー・アンダーソンの著名な「国民文化の構成要素」に関する論考（1968年）である。アンダーソンによれば、学問の専門分化の一般的過程と軌を一にしつつ、哲学がいわゆる分析哲学として高度にテクニカルな手法を整備しディシプリンとしての自律性を強固なものとしたイギリスにおいて、あるいは大陸諸国と対照的にマルクス主義と社会学の理論的展開をみせることのなかった同国において、行き場を失った「全体性」を代替的に担うことになったのは、F.R. リーヴィスに代表される文芸批評の実践だった。だから、『聖なる森』のT.S. エリオットから『長い革命』のレイモンド・ウィリアムズまでを扱うコリーニの最新刊 *The Nostalgic Imagination* (2019) は、ある意味でイギリス型知識人研究の書ともいえる。

知識人が非イギリス的存在であるという文化的想定が、少なくとも19世紀初頭に遡るイングランドの歴史に根を張るものであるというのは、この問題がイングランド人たちの自己理解、それもフランスに体现させられた大陸的他者との対照で模索された国民的自己規定のあり方の一局面をなすものであるからだ。すなわち、大陸の政治的騒擾を横目に、イングランドの辿った例外的に幸運な政治史的道程を言祝ぐホウィグの歴史感覚の20世紀的ヴァリエーションとして、イギリスにおける「知識人」をめぐる諸言説を解釈することができるというわけである（アンダーソンのように、知識人という大陸的種族の不在を言祝ぐのではなく嘆くものも、共有された枠組みの中で価値判断を転倒させているにすぎない）。グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーが流行するなか、コリーニが執拗にイングランドとイギリスの国民文化の問題にこだわり続けているようにみえるのも、*Public Moralists* から *The Nostalgic Imagination* までを貫く一つの柱が、ホウィグ史観とその変奏、そしてその敵対者たちの織りなす、ナショナル・アイデンティティをかけた歴史をめぐる闘争劇であったからだ。コリーニの研究が20世紀にその主眼を移したとして、やはり彼の主要な問題関心の一つは、イギリス国民の歴史解釈を通じた自己理解のあり方という主題なのであって、ここには当然、1901年以降のイギリス人たちがヴィクトリア時代にいかなる解釈と意味付けを施し、それをいかに国民的過去として自らのものとするに至ったかという問いが含まれる——この点に、ヴィクトリア朝研究に従事する者にとってコリーニの最近の仕事が持ちうるもう一つの意味を見出すことができるのではないだろうか。

今年刊行されたばかりの *The Nostalgic Imagination* は、1920年から60年頃までの間に活動したイギリスの文芸批評家たちが、いかにその著作を通して国民的過去を解釈し、自身の歴史のヴィジョンを一般公衆にアクセス可能な形で提示したかを問題にする文芸批評思想史とでも呼ぶべき研究書である。ヴィクトリア時代がホウィグ史観の時代であるとして、その後半には、ドイツの歴史主義の影響下で、公文書を中心とするアーカイヴ調査を基礎にしたより科学的、実証的な研究を志向する、歴史研究の専門職化の流れが生まれてくる。ランケ的理想を掲げるこれら「ポスト・ホウィグ史観」の歴史研究は、20世紀半ばにはアカデミックな歴史の主流としての地位を固め、この時代、大学内の歴史研究は、おおた一般読者に開かれたポピュラーな歴史叙述を生み出す仕事から手を引くことになる。コリーニの見立てに従えば、こうして穿たれた空白を埋めるべくしてオルタナティブな歴史観を携え台頭した一つの勢力が、エリオットからウィリアムズに至る一連の文芸批評家たちであった。

彼らは政治史や外交史こそがマトモな歴史研究の対象であると考えた実証主義歴史学が興味を示さなかった「ひとびとの生活の質」を問題化した。そうすることで、前世紀に隆盛をみた国制の展開を中心に据える楽観的なナラティブとは対照的に、近代における科学的思考の遍在化や産業資本主義の発展、あるいは大衆文化の出現といった諸要因がひとびとの精神や旧来の文化のあり方にもたらした負の影響に焦点をあわせるペシムスティックな反ホウィグ的歴史解釈を描き出すことが可能となった。そうしてこれらの文芸批評家たちは、自らの通俗的歴史観を紡ぎ出す素材に関して、過去のひとびとの生活の質を記録する最も優れた史料が文学作品なのだというある種の文学主義イデオロギーを発明することとなるのである。ヴィクトリア時代を専門にする者に最も関連が深いのは、やはり産業革命とその帰結をめぐる諸問題で、具体的にはウィリアムズの『文化と社会』が暗に前提とする歴史解釈と、その恣意的なカテゴリー設定が（とりわけ文学研究と関連分野における）ヴィクトリア朝思想史のニュアンスに富んだ理解を妨げてきた事実と議論が及ぶ箇所である——とはいえこれについては実際にコリーニの文章にあたっていただくのがよいだろう。

ワイリー・ブラックウェル社の *A Companion to Intellectual History* (2016) に寄稿したエッセイで、コリーニは、いまだこの思想史の実践は（とりわけイギリスにおいて）政治思想との結びつきが強すぎるから、今後は文芸批評の歴史を初めとする多様な領域に触手を伸ばし対象を豊かにしてほしいと自身の希望を述べている。また、文芸批評は思想史の対象としてのみならず、その方法としても有効だという。これも実のところ *Public Moralists* の序論で明言されていたことであるが、少数の専門家のみならずより広く一般公衆に語りかけることが定義上要請される存在が知識人である以上、彼らの語りかけるオーディエンスが誰であり、また彼らが共有している諸価値として書き手が何を前提としているかを知るためには、書かれた内容のみならず、いかに書かれて

いるかという言葉の使われ方の水準にまで論じ及ぶ必要がある。彼にいわせればここで必要になるのが文芸批評の手法である。だから本エッセイのタイトルの文言は、単に彼の最新刊の内容を表現するものとしてのみならず、*Public Moralists*以降のコーリーニの仕事のあり方そのものを念頭に置いて選んだつもりである。

読書会レポート

東京大学大学院 塚越 幸祐

「真理半ば」(half-truth) — 深貝保則先生をお招きして行われた J. S. ミルの『自由論』読書会（於明治大学駿河台キャンパス）で先生が発したこの語は、読書会の総括であり『自由論』の精髓ともいえるだろう。そもそも、『自由論』は「自由」とは何かについて雄弁に語る書物ではない。持続と進歩が共存する社会を希求するミルにとって、「自由」もまた繰り返される個性の勃興のなかでそのかたちを調整され続けるべきものであった。その意味では、『自由論』という書名自体が奇妙にも思える。この本が扱うのは、実際には「自由」をこうして問わねばならないある種の不自由さなのだから。だとすれば、21世紀を迎えた今なお、あるいはより一層強烈に感じる『自由論』のアクチュアリティを手放して称賛すべきだろうか。私たちは『自由論』が提起したいまだ真理半ばの問いを引き受ける立場にある。

最後に一つ、ミルの活動をまとめた全33巻の著作集は現在、ウェブ上で索引を除くすべてが無料でアクセスできる。この知の英断にどう応答すべきかは個人の自由である。こちらも深貝先生にご教示いただいた。重ねて謝意を示したい。

東京ヴィクトリアン・ツアー レポート

一橋大学講師 江澤 美月



第一回となるツアーでは、東京に再建された二つのヴィクトリア朝建築として、三菱一号館と東京駅を訪問した。三菱一号館は、コンドル自身が、創建当初中央停車場であった東京駅は、コンドルの弟子辰野金吾が設計したものである。このように設計者は異なるものの二つの建物には、再建前、ヴィクトリア朝時代に流行したクイーン・アン様式の建物であったという共通点が見られる。ツアーに先立ち、東京駅修復に携われた鈴木博之先生の御講演要旨「J・ラスキンは東京駅修復を認めるか」が提示され、当日は現三菱一号館美術館の外側の考察から始まった。その後美術館の西野龍生氏より、再建についてのご苦勞を伺い、先に観察したコンクリート加工擬石についても、手仕事仕上げであることが明らかになった。会期中の展覧会を鑑賞した後向かった東京駅では、小宮彩加先生のガイドによりその成り立ちを概観し、北口、中央口、南口の順に見学した。

大石和欣先生によると、東京駅は擬石に加え花崗岩を併用して質感を高め、また戦火による消失を逃れたレリーフを使用するなど、三菱一号館よりも復原率が高いが、証言に従い再現された屋根ドームの色のように、当時の色の完全な復原が否かは検証しきれない部分がある。現代の技術力の粋に感銘を受けつつも復原の難しさを肌で感じたツアーだった。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2018 年度総会

日 時：2018 年 11 月 17 日（土） 17 時 45 分～18 時

場 所：日本女子大学目白キャンパス 新泉山館 大会議室 （司会：佐藤和哉 事務局長）

『ヴィクトリア朝文化研究』第 16 号 佳作 表彰

総会に先立ち、『ヴィクトリア朝文化研究』第 16 号に優秀論文賞佳作を授賞した Neil Addison 氏（論文“Dickens, Hardy and ‘a London Particular’: Scientific Entropy, Medical Epidemiology and the Miasmatic Literary City”）の表彰が行われた。

議 題

【報告事項】

1. 2018 年度活動報告

I. 運営委員会、役員会関係

2018 年 7 月 28 日	第 1 回 運営委員会（日本女子大学）
2018 年 11 月 16 日	理事会（日本女子大学）
2019 年 1 月 26 日	第 2 回 運営委員会（日本女子大学）
2018 年 1 月 20 日	第 1 回 編集委員会（日本女子大学）
2018 年 7 月 28 日	第 2 回 編集委員会（日本女子大学）

II. 学会誌、ニューズレター

2018 年 5 月	<i>The Victorian Studies Society of Japan Newsletter</i> No. 17 発行
2018 年 11 月	『ヴィクトリア朝文化研究』（ <i>Studies in Victorian Culture</i> ）第 16 号発行

III. 全国大会関係

2018 年 11 月 17 日	第 18 回 全国大会開催（日本女子大学）
------------------	-----------------------

IV. その他

2018 年 5 月	第 19 回大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集
------------	-------------------------------

会員情報（対象期間：2017 年 4 月 1 日から 2018 年 3 月 31 日まで）

新規入会者 13 名 退会者 22 名 2017 年 3 月 31 日現在 会員 313 名（うち学生 23 名）

2. 学会誌について

上記の通り、発行された。

3. 大会・企画委員会の活動について

大石和欣、川崎明子、小宮彩加、松本靖彦（東日本）、玉井史絵、高橋美帆、奥村真紀、吉田朱美（西日本）の各氏が、大会・企画委員として大会準備を進めるとともに、学会を活性化するための企画を計画中であることが報告された。

4. その他

【審議事項】

1. 2017 年度決算

資料にもとづき報告され、了承された。

2. 2018 年度予算案

資料にもとづき報告され、了承された。

3. 事典刊行について

2017 年度の総会で出版が承認された『ヴィクトリア文化事典』の概略と編集委員が報告され、了承された。

4. 2019 年度の理事会と大会について

2019 年度は、11 月 23 日（土）に近畿大学東大阪キャンパスで開催される予定となった。

5. その他

特になし



2017 年度決算報告書（2017. 4. 1～2018. 3. 31）

《収入の部》

単位:円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	5,781,889	
利子	17	ゆうちょ銀行
出展料	20,000	4 社
学会費	1,794,000	
関学より学会補助費	61,404	
学会誌販売	8,000	非会員向け
合計	7,665,310	

《支出の部》

項 目	金 額	備 考
通信費	93,108	郵便、手数料等
大会経費	204,233	大会会場費、プログラム・ポスター制作/郵送費、アルバイト料など
懇親会費	85,449	会場使用料、飲食代
学会誌作成・郵送費	640,608	
学会誌用図書費	93,529	
振込手数料	34,772	学会費振込時

消耗品費	8,715	文具等
役員会費	0	理事会会場費
役員交通費	543,118	理事会開催時(年 2 回)
非会員謝礼、交通費等	180,000	学会誌執筆謝礼(12 名)
事務局員謝礼	240,000	月¥10,000×2 名
その他	10,008	委員会お茶・お菓子など
合計	2,133,540	

次年度繰越金 5,531,770

以上のとおりご報告いたします。

2018 年 8 月 2 日

会 計 佐藤 和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2018 年 8 月 4 日

会計監査 松村 伸一

2017 年度懇親会決算報告書(2017. 11. 18)

《収入の部》

単位:円

項 目	金 額	備 考
懇親会費	182,000	5,000 円×34 名+3,000 円×4 名
懇親会費当日支払い	0	
合計	182,000	

《支出の部》

項 目	金 額	備 考
飲食代等	195,416	
会場費	5,000	
消費税	16,033	
払い戻し	51,000	
合計	267,449	
収入－支出	-85,449	(懇親会補助費として学会が負担)

以上のとおりご報告いたします。

2018 年 8 月 2 日

会 計 佐藤 和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2018 年 8 月 4 日

会計監査 松村 伸一

2018 年度予算案(2017. 4. 1～2018. 3. 31)

《収入の部》

単位：円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	5,531,770	
会費	1,786,000	一般会員 290 名、学生会員 23 名(2018 年 3 月 31 日現在)
出展料	20,000	4 社
合 計	7,337,770	

《支出の部》

項 目	金 額	備 考
通信費	80,000	
大会経費	300,000	2017 年度 204,233 円
懇親会費	90,000	2017 年度 85,449 円
N. L. 刊行費	0	2016 度よりオンラインにしたため
学会誌作成・郵送費	650,000	2017 年度 640,608 円
学会誌図書費	90,000	書評用図書 2017 年度 93,529 円
優秀論文賞	50,000	
振込手数料	20,000	学会費振込時 振込方法の変更を検討(40,000 円から減額)
消耗品費	10,000	文具等 2017 年度 8,715 円
役員会費	10,000	理事会、運営委員会、編集委員会(17 年度 0 円)
役員交通費	300,000	運営委員会、編集委員会(16 年度 309,826 円)
事典編集委員会交通費	400,000	
非会員謝礼、交通費等	100,000	2017 年度 160,000 円(謝礼 12 名分)
事務員謝礼	300,000	事務員 2 人(10,000×2×12)、事典編集書記(6 月から。6,000×10)
予備費	100,000	事典刊行に備え
合 計	2,500,000	
次年度繰越金	4,837,770	

合 計	7,337,770	
-----	-----------	--

第 19 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 19 回大会は、2019 年 11 月 23 日（土）に近畿大学東大阪キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「ヴィクトリア朝と音楽——せめぎ合う境界」（仮題）で、モデレーターは金山亮太（立命館大学教授）、パネリストは吉田朱美（近畿大学准教授）、西阪多恵子（お茶の水女子大学研究員）、山崎太郎（声楽家）の予定です。山崎氏による声楽の披露もあります。

特別講演は香川せつ子氏（西九州大学教授）をお願いすることになっています。予定のテーマは「ヴィクトリア朝とスポーツ」です。どうぞ、振るってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）に略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りいただくか、あるいは添付ファイルで学会のメールアドレスまでお送りください。メールの場合、送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いいたします。締切は 2019 年 7 月 4 日（木）必着です。

第 20 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2020 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 20 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）におけるシンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。締切は 2019 年 12 月末日必着といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2020 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締切：2019 年 12 月 31 日（火）必着

2. 申請方法：様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までメールにてご提出ください。下記の「シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書（Excel 形式）」を利用していただいても結構です（<http://www.vssj.jp/conferences.html>）からダウンロードしてお使いください。

3. 申請書必要記載事項

① シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル

② 趣旨（400 字程度）

③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）

④ プログラム

1) 司会（氏名、所属）2) 報告者（氏名、所属）3) 各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）

4) タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度（休憩含む）に収まるように計画してください）

※シンポジウム／ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1 日本女子大学英文学科佐藤和哉研究室

Tel: 03-5981-3560 E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

〜〜〜編集後記〜〜〜

シリーズのヴィクトリア朝文化研究のパイオニア的存在と若手研究者によるエッセイを二編、さらに昨年末の企画の読書会とツアーの参加レポートを掲載いたしました。お楽しみいただければ幸いです。ご寄稿くださいました方々には心より御礼申し上げます。本号をもちまして、編集担当の任期が終了いたします。4 年間、ご支援をいただき、ありがとうございました。

（NL 担当 市川 千恵子）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

日本女子大学英文学科 佐藤和哉研究室

Tel: 03-5981-3560

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

発効日：2019 年 5 月 1 日

